

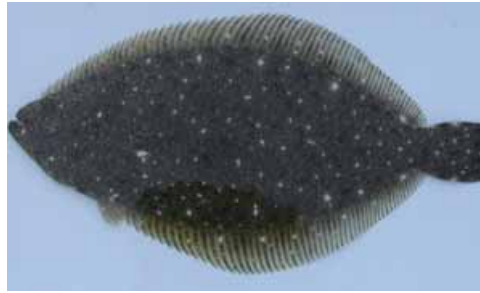
平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

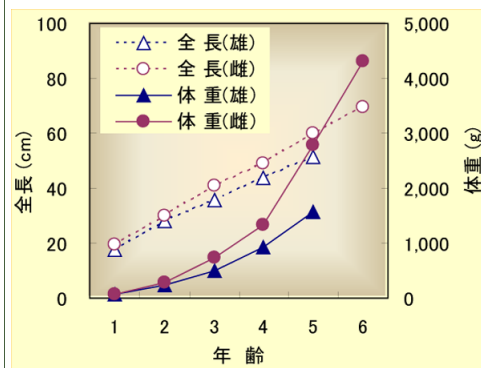
系群名 日本海北・中部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳、雌3歳
産卵期・産卵場: 春～夏季(4～7月)、水深50m以浅
索餌期・索餌場: 秋～冬季(8～3月)、水深150m以浅
食性: 着底後はアミ類など、その後魚類が主食、他にはイカ類、エビ類、カニ類等
捕食者: 稚魚期にはより大型のヒラメをはじめマゴチ、オニオコゼ、アナハゼ、イシガニ、エビジャコ等

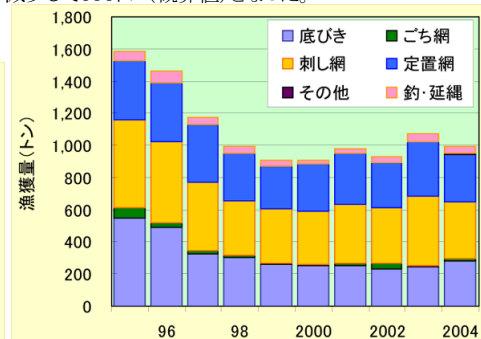
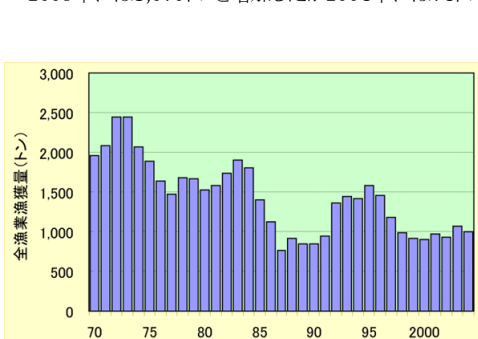


漁業の特徴

本種は沿岸性の高級魚で、栽培漁業の代表的対象種である。日本海沿岸の北～中部の各府県(青森～兵庫)で主に刺網、定置網、底びき網などで漁獲されている。

漁獲の動向

漁獲量は1988年以降増加傾向にあったが、1995年の1,581トンとピークに1997年は1,175トン、1998年は991トン、1999年は910トンと減少した。その後、2000年は909トン、2001年は979トン、2002年は925トンと横ばい傾向が続き、2003年には1,070トンと増加したが2004年には74トン減少して996トン(概算値)となった。



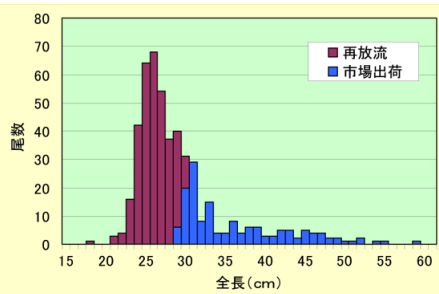
資源評価法

漁獲量の推移から資源の動向を判断した。CPUEの指標としてこの海域でのヒラメの主要な漁業である刺網と小型底びき網1種の出漁日数、小型定置網と大型定置網の漁労体数に対する漁獲量の割合を検討したところ1998～1999年までは減少、その後はゆるやかに増加傾向で、漁獲量の増減と同じ動向であった。このことから漁獲量は資源量を反映しており、漁獲量の推移から資源動向を判断することは妥当であったと考えられる。

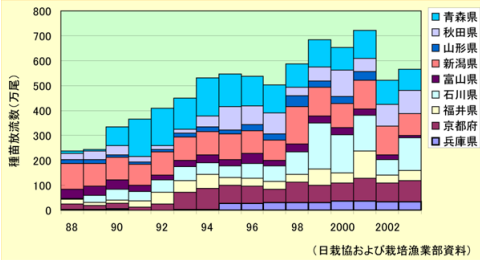
資源状態

長期的な漁獲量の推移から判断すると、資源の水準は低位と考えられた。また、漁獲量は1998年以降は900～1,100トンで推移していることから資源の動向は横ばいと判断された。





標本船（新潟県岩船港漁協所属）が2004年9月16日に板曳網で漁獲したヒラメの全長組成。全長規制が30cmのため、漁獲物のうち個体数で69%、重量で41%が再放流された。



（日裁協および栽培漁業部資料）

管理方策

漁獲量の推移から資源水準は低位で横ばい傾向と判断された。資源水準を回復するためには漁獲量の削減が望ましいと考えられた。過去5年間（2000～2004年）の平均漁獲量×0.8をABClimit、さらにABClimit×0.8をABCtargetとした。

	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	780トン	0.8Cave5-yr	－	－
ABCtarget	620トン	0.8・0.8Cave5-yr	－	－

資源評価のまとめ

- 漁獲量の推移より資源の動向を判断
- 1998年以降の漁獲量は、900～1,000トン程度の低水準
- 資源水準は低位で、動向は横ばい傾向

管理方策のまとめ

- 資源水準が低位であり、資源水準の回復のために漁獲量の抑制が必要
- 漁獲物の多くを1歳魚が占めており、若齢魚保護のための有効な対策が必要

資源評価は毎年更新されます。
2005.12.7更新